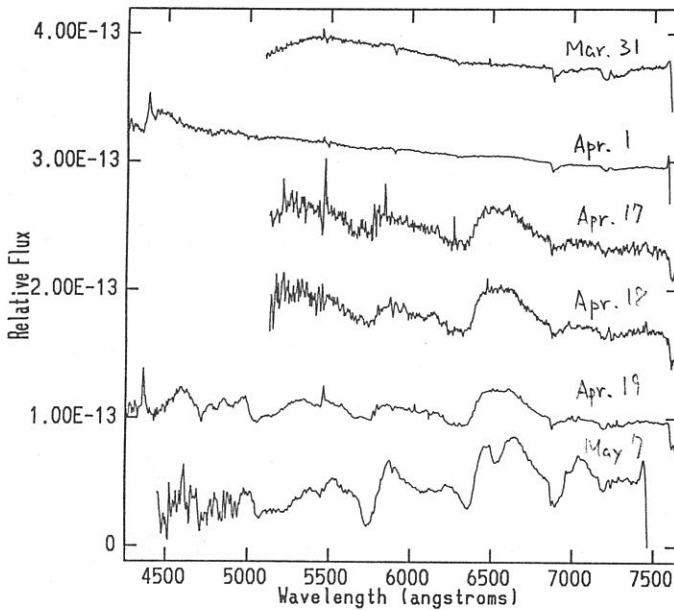


光学天文連絡会

Group of Optical and Infrared Astronomers (GOPIRA)

会報

No. 68



SN1993Jのスペクトル (大宇陀 60cm 鏡による)

平成5年6月30日

光学天文連絡会事務局
(京都大学理学部)

目次

I	第17回光学天文連絡会総会報告	1
II	光学天文連絡会運営委員会報告	6
III	第25回国立天文台運営協議員会報告	9
IV	国立天文台光学赤外・太陽専門委員会報告	10
V	第1回国立天文台理論計算機専門委員会議事録	12
VI	岡山観測所の将来について	14
VII	すばるに関する京都宇宙物理学教室での議論	15
VIII	すばるコーナー	16
IX	会員異動等	17

尚本号には岡山観測所の運用に関するアンケートが同封されています。

会費納入のお願い

今年度（平成5年度、1993年度）の会費納入をお願いします。会報にはさんでありませ、郵便振替にてお願いします。一般2000円、学生1000円となっております。尚、今年度総会にて、2年以上の会費滞納者には、その旨通知し、なお支払のない場合には退会とみなすことが決まりました。該当する方には通告が本会報に入っていますので、ご注意ください。

I 第17回光学天文連絡会総会報告

日時 平成5年5月11日(火) 19時00分-20時00分
場所 相模原市民会館第1大会議室(天文学会春季年会会場 B会場)
出席者 22名

1. 平成4年度報告

- A) 活動報告 上野副運営委員長
- a) すばる計画の支援
 - b) 国内既存施設の有効利用
 - c) 大学連合天文台の可能性について
 - d) 光・赤外将来計画策定への協力
 - e) 光・赤外ユーザーズミーティングの後援について報告された。(詳細は別掲)

- B) 会務報告 金光事務局長
別掲

- C) 会計報告 小林会計
別掲

- D) 平成5年度運営委員選挙報告
既報(会報 No.67)

2. 平成5年度光天連体制

以下のように承認

A) 運営委員会

- 委員長 谷口義明
副委員長 上野宗孝
委員 市川伸一、市川 隆、戎崎俊一、岡村定矩、小平桂一、定金晃三、舞原俊憲、若松謙一

B) 事務局

- 事務局 京都大学・(宇宙物理+物理第二)
事務局長 大谷 浩
庶務 太田耕司
会計 長田哲也

3. 平成5年度活動方針 上野副運営委員長

基本姿勢：重要検討項目に関して集中的に議論を重ね検討していく体制を取る。そのために本年度は副委員長を設ける。

活動方針

- a) すばる計画の支援及び光天連シンポジウムの開催（世話人：上野）
 - b) 大学の光赤外部門の活性化及び大学（連合）天文台計画の推進（世話人：谷口）
 - c) 国立天文台岡山天体物理観測所の運用体制について（世話人：定金）
 - d) 光・赤外将来計画策定への協力
 - e) 光・赤外ユーザーズミーティングの開催後援
- 詳細は別掲。

4. 会費滞納者の扱いについて

2年以上滞納者には通告して、それでも支払いがなければ退会とすることが決まった。

5. その他（関連行事、会報に載ったもの）

開催日	場所	出席者数
第10回天文情報処理研究会 平成4年 6月26、27日	京都大学宇宙物理教室	40
第11回天文情報処理研究会 平成4年 9月8、9日	小川町町民会館	33
「すばる」高分散分光天文学研究会 平成4年11月4、5日	国立天文台三鷹講義室	38
「すばる光学系と観測装置」研究会 平成4年12月2-3日	国立天文台三鷹講義室	50
第12回天文情報処理研究会 平成4年12月8、9日	国立科学博物館・国立天文台三鷹講義室	35
観測天文学ソフトウェア開発シンポジウム 平成4年12月9-10日	国立天文台三鷹講義室	56
「HST」による天文学 平成4年12月11日	国立天文台三鷹講義室	25
「専用計算機を用いた観測装置・観測天文学」ワークショップ 平成4年12月16日	東京大学教養学部	22
「ISOによる天文学」ワークショップ 平成4年12月17日	国立天文台三鷹講義室	56
第13回天文情報処理研究会 平成5年 3月1、2日	上松町勤労者福祉会館	29
「すばる」観測装置大ワークショップ 平成5年 3月23-25日	東京大学総合図書館	75

「すばる」データ取得・解析研究チーム (SDAT) 会合 第7 - 最終回

第7回	平成4年 6月4日	国立天文台三鷹	5
第8回	平成4年 6月18日	国立天文台三鷹	9
第9回	平成4年 7月2日	国立天文台三鷹	8
第10回	平成4年 7月28日	国立天文台三鷹	12
第11回	平成4年 8月25日	国立天文台三鷹	8
第12回	平成4年 9月9日	小川町	13
第13回	平成4年 9月22日	国立天文台三鷹	7
第14回	平成4年 10月8日	国立天文台三鷹	12
第15回	平成4年 10月20日	国立天文台三鷹	5
第16回	平成4年 11月4日	国立天文台三鷹	6
第17回	平成4年 11月25日	国立天文台三鷹	7
第18回	平成4年 12月1日	国立天文台三鷹	6
第19回	平成4年 12月24日	国立天文台三鷹	11
第20回	平成5年 1月13日	国立天文台三鷹	6
第21回	平成5年 1月26日	国立天文台三鷹	8
第22回	平成5年 2月10-12日	木曾観測所	9
臨時	平成5年 3月4日	国立天文台三鷹	5

6. 会報等発行

会報 No.64 (33頁)	平成4年 6月17日
会報 No.65 (35頁)	平成4年 9月28日
会報 No.66 (48頁)	平成5年 1月8日
会員名簿	平成5年 2月1日
会報 No.67 (22頁)	平成5年 4月28日

(金光理記)

3. 残高

4. 会費納入状況

92年度分 前年度までの納入者	8名
当年度納入者	209名
未納者	62名

(光天連事務局会計)

1992年度会務報告

1. 総会

	開催日	場所	出席者数
第15回総会	平成4年5月13日	大阪学院大5号館	33
第16回総会	平成4年10月13日	名古屋大学豊田講堂	22

2. 運営委員会

第66回	平成4年5月13日	大阪学院大	11
第67回	平成4年8月26日	国立天文台三鷹輪講室	9
第68回	平成4年10月13日	名古屋大学シンポジオン会議室	4
第69回	平成5年4月16日	国立天文台三鷹講義室	12

3. 選挙

運営委員選挙 平成5年3月

4. シンポジウム、ワークショップ（光天連後援のもの）

すばる観測装置ワークショップ拡大世話人会	平成4年5月22-23日	上松町寝覚の床国民宿舎	18
第3回光赤外ユーザーズミーティング	平成4年8月26-27日	国立天文台三鷹講義室	80

1992年度光天連会計報告（1993年5月9日現在）

1. 収入

799,198円

内訳 前年度繰越 287,628円
会費 507,000円

内訳 88年度分 一般 1名
89年度分 一般 1名
90年度分 一般 1名、学生 1名
91年度分 一般 33名、学生 6名
92年度分 一般 197名、学生 12名
93年度分 一般 11名

郵便貯金利子 4,570円

2. 支出

429,490円

内訳 印刷費 226,600円

内訳 会報No. 64 49,440円
会報No. 65 51,500円
会報No. 66 70,040円
会報No. 67 33,990円
会員名簿 21,630円

郵送料等 177,503円

郵便振替払込料加入者負担 9,990円

封筒・文具等 15,397円

3. 残高

369,708円

4. 会費納入状況

92年度分 前年度までの納入者 8名
当年度納入者 209名
未納者 62名

（光天連事務局会計）

II 光学天文連絡会・運営委員会報告

1993年5月11日

議長：上野宗孝（運営委員長代理）
運営委員：市川伸一、市川隆、上野宗孝、岡村定矩、小平桂一、
定金晃三、舞原俊憲
（欠席委員：戎崎俊一、谷口義明、若松謙一）
事務局長：金光理
新事務局長：大谷浩

本運営委員会では主として平成5年度活動方針について議論された。

議論された内容は4月16日に行なわれた運営委員会の結果を受け、谷口委員長からたたきだいが提出され、それを元にして議論を進めた。以下にそのたたきだいをまとめる。

- 1、すばる計画の支援
- 2、光天連シンポジウムの開催
- 3、大学連合天文台の可能性について
- 4、光・赤外将来計画策定への協力
- 5、光・赤外ユーザーズ・ミーティングの開催後援

以下議論の内容

1、すばる計画の支援

以下の分野のワーキンググループを作ることが確認された。

SUBARU運用体制WG

SUBARU計算機・データ解析WG

さらに2の項で取り上げられる様に、光天連シンポジウムを通して光天連の意見を天文台側にアピールする場を作ること、また光天連の構成メンバーが積極的にすばる計画に参加できるような雰囲気作りをすることなどが重要であることで認識が一致し、光天連会報などを含めた活動を展開することを活動方針案とすることとした。

2、光天連シンポジウムの開催

本年度はすばるがらみで光天連シンポジウムを開催する方向で議論された。まず前回の運営委員会に引き続き上野委員から「すばるの体制」に関するシンポジウムを開催する提案が出された。その内容は広い意味での体制を議論することであり、運用体制・国内及び観測所の体制・開発体制などの全てが含まれる。特にこれからすばる用の観測装置を開発するグループが名乗りを挙げ始めている現在、例えば各装置のPIにはどのようなプライオリティーが与えられるか等ということは早期に議論を進めておかなければならないことであろう。またすばるに必要な各観測装置を開発して行ける拠点を強化するためには、光天連の組織としてはどのようにして行くべきかと言う

ことなどを議論していく場にしたいと言う内容であった。しかし体制問題のなかでも国内・観測所の体制、データ解析センターの体制などは国立天文台が主体となり、議論を進めていくべきであるとの意見が出された。

また大谷委員からは「すばるで行なうサイエンス」という内容のシンポジウムを開催する提案が出された。これは従来よりすばるに関するシンポジウムがすばる本体の技術的な内容や観測装置に関することなどに偏っており、一度きちんとすばるで行なうサイエンスに関して腰を据えて議論すべきではないかという内容であった。この提案に関してはやはり重要なことであり、継続的に議論すべきであるが、すばる完成時に行なうであろうサイエンスを今この時点で議論することは難しい点があるとの意見が出た。しかしすばるプロジェクトが進められて行く上でもっとも重要なテーマであり、継続的にその様なことが議論される場が必要である。そこでこのことは常にアップデートされることを前提に議論の場を持つべきであろうとの意見で一致を見た。またすばるで重要なサイエンス（プロジェクトサイエンス）があればその様な計画をどのような体制で実現するかなどという問題はやはり光天連で議論すべき問題であることが認識された。

最終的には両者の意見をまとめて、今年度の光天連シンポジウムは「非常に広い意味でのすばるの体制」という主旨で行なわれることとなった。この中には先に触れたサイエンスの問題を当然含むものとする。ただしこのように大きなテーマのシンポジウムを限られた時間で開催すると、散漫なシンポジウムになり、議論が沸騰してきたころには時間切れとなってしまうことが危惧された。このため今年度はシンポジウム開催に先だって、プレシンポジウムと称する拡大運営委員会（運営委員+関係者）合宿を夏ごろ（ユーザーズミーティングの前後）に行ない十分に問題点を洗いだしおき、それぞれの問題について宿題を与えておいたうえで本シンポジウムを開催することが方針として決定された。またこれに伴い、光天連シンポジウムの時期は秋に予定されることとなった。

（世話人：上野）

3、大学連合天文台の可能性について

これまでいくつかの大学から（京都大学、大阪大学、東京大学、東北大学など）中小口径望遠鏡の建設計画が出されているが実現には至っていない。しかし通らないプロジェクトを長期間提案し続けることの問題性などが取り上げられ、また以前からお互いに協力することの必要性などが望まれていたことなどを考え合わせて、今年度は大学連合天文台の可能性を真剣に議論することで意見の一致を見た。特にそろそろ本当に建設することが必要だと思われるのであれば、それを実現することが可能な方法をきちんと考えるべきである。これらのことを受けて既に谷口委員からこれまで中小口径望遠鏡の提案を出してきていた機関及び既に天文台を持つ機関などにアンケートの形で調査が始められており、この結果に基づきこれからの方針を検討することとなった。（世話人：谷口）

4、光・赤外将来計画策定への協力

岡村委員から天文研連の長期計画小委員会に提出された資料が配付されその内容に関して報告があった。内容に関しては「21世紀に向けての天文学長期計画」第一次案等を参照していただきたい。光天連ではこれまでもこの資料の作成に協力を行ってきており、これからも協力を続けるということ意見の一致を見た。

III 第25回国立天文台運営協議員会報告

日時 1993年5月31日(月) 11時-16時10分

場所 国立天文台講義室

出席者 海部(会長)、田原(副会長)、奥田、佐藤、杉本、祖父江、土佐、
中川、牧田(以上台外委員)、石黒、稲谷、木下、小杉、小平、近田、
西村、平山、観山、横山(以上台内委員)、台長、管理部長、
(欠席:大師堂、向井)

1. 議事に先立って、最近の研究成果が3件報告された。
2. 平成6年度概算要求について説明があり、議論された。
3. 教官人事。
外国人客員教授 P. Brosche (ボン大学)
4. 今後の人事の進め方について議論し、次のように公募することにした。
電波天文学研究系 助手2名
5. 台長選考過程について議論した。
6. 大学院問題(総合研究大学院大学、各大学での大学院重点化の状況など)について情報を交換した。

(文責 西村)

5. 光・赤外ユーザーズミーティングの開催後援

昨年度は光赤外ユーザーズミーティングに関して光天連は直接関与しない体制を取ったが、やはりユーザーズミーティングのユーザー側の声の代表という形で光天連がその開催の後援を行なうべきではないかとの意見が出された。また今年度はユーザーズミーティングの時期に前後して光天連シンポジウムのプレ合宿が行なわれることなどもあり、光天連からもユーザーズミーティングの世話人を出すこととした。運営委員会ではこの世話人として大谷、岡村、定金、谷口の4委員を推薦して光天連総会に提案することとなったが、総会において世話人に若い人を選ぶべきだという意見が出され、これを受けて谷口委員長・上野副委員長の話し合いにより太田、上野の2委員を世話人として選出することとした。開催時期などに関しては観測所側の世話人(岡山:前原、堂平;菊池、木曾;中田 以上敬称略)と協議して早期に決定されることとなった。

以上が本年度の活動方針に関しての内容であるが、運営委員会ではこれ以外に以下の議論が行なわれた。

定金委員から岡山観測所及び観測装置計画に関するアンケート案が提案され了承された。詳しくは本会報中に記載(同封)される予定のアンケートを参照されたい。

市川伸一委員から光天連の高齢化問題が取り上げられた。近年特に学生会員が激減しており、新規入会者が減っている。これは光天連の魅力が失われているのではないかとの意見が出された。本年度は光天連としての活動をアピールすることが重要であり、光天連の存在意義自身を明確にして行くことの重要性が改めて認識された。特に最近光天連総会の参加人数も減少しており、光天連への関心の低下は明らかなようである。本年度は光天連の活動をアピールして行くことで意見の一致は見たが、具体案が提出されるには至らなかった。この件に関しては運営委員会で継続的に審議を行なう。

金光事務局長より会費滞納者に関する報告があり、この取り扱いに関して議論を行ない、2年間会費を滞納した会員には最後通告を送りレスポンスの無い(又は脱会の意志を表明された方には)以降会報等の郵送物を発送しないという内容で総会に提案されることとなった。

以上運営委員会報告。

昨年度の光天連は積極的な活動をあまり行なわない体制で進められたが、本来の光天連の大目標であったすばる望遠鏡の建設も動き始めている現在、本年度は光天連の存在意義を改めて問いかけるべき時期に当たっているのではないだろうか。本年度はこのことを鑑み光天連が果たす役割を十分に発揮できるような一年にしたいと考えている。このことを本年度の活動方針の最後に付け加えて報告を閉じる。

(文責:上野宗孝)

編集者注:本報告中、太田が運営委員であるかのような表現がありますが、運営委員ではありません。念のため。

おしらせ

光赤外ユーザーズミーティング

日時 9月16日(木)-17日(金)

場所 国立天文台 三鷹

初日 堂平・木曾

2日目 岡山・総合討論

の予定です。

(世話人 中田・前原・菊池・上野・太田)

IV 国立天文台光学赤外・太陽専門委員会報告

6月1日午後国立天文台会議室にて、上記委員会が開催された。今回は運営協議委員会が新しく発足したことに伴い、本年8月に構成された新委員会の第1回会合であった。新しい委員会のメンバーは；

台外委員：岡村定矩、小倉勝男、尾崎洋二、黒河宏企、佐藤修二、橋都生夫

台内委員：小平桂一、桜井隆、柴崎清登、西村史朗、平山淳、前原英夫

また、ex officio として、装置小委・プログラム小委の委員長（前期は家正則、若松謙一）および観測所長（菊池仙）が加わっている（敬称略）。

冒頭、台長による開会の辞に引続き、委員長等の選出が行われた。委員長：平山淳氏、副委員長：岡村定矩氏、幹事：前原英夫が選出された。

1. 系・施設の報告

各研究系・施設の予算・決算、事業についての報告が行われ、質疑・討論が行われた。

なお、本専門委所轄の研究系・施設は；

系：大型光学赤外線望遠鏡計画推進部、光学赤外線天文学、太陽物理学

施設：岡山天体物理・堂平・乗鞍コロナ観測所、太陽活動資料解析センター

新設の開発実験センターも今回からこの専門委に所属することとなった。

事業については、岡山ではカセ分光器、偏光撮像装置、エンジニアリングタイム等について報告があり、また早期にCCDカメラの更新を考える、旨の意見が出された。

堂平では「共同利用者の会」の発足、ドーム修理についての報告等があった。

2. 小委の報告

プログラム小委は岡山・堂平両観測所の観測プログラムの編成について、188cm望遠鏡課題のスクリーニングを含めて活動を行った。また、プログラム編成に関連する重要事柄の討議も行った。エンジニアリングタイムの導入や観測申込書フォーマットの改訂については具体的な進展を見たが、スクリーニング制の評価やプロジェクト制の導入等については結論がえられず、次期委員会への送り事項となっている。

装置小委は機器開発の状況や財源の調査、岡山の装置の運用等についての専門委への答申を行った。しかし、装置開発の decision making への寄与・権限が現在の小委ではかなり制限されており、今後小委の枠組を変えるか権限を拡大するかしないか、機器開発推進への力となれないことが報告された。

3. 専門委の構成と小委の設置

これまで、光学赤外と太陽とで別個の問題を抱えていることが多く、別の専門委に別れる方がいいという意見があったが、共通の問題もあることであり、また多くの専門委を置かないという国立天文台の基本方針もあり、この考えはこれまで運営協議委員会に出すところまで行っていない。このことを加味しつつ小委員会の設置について討議した。

まず、多波長域にわたる太陽観測の計画策定・検討のために、「太陽小委員会」（台外4名、台内6名）を設置することが決議された。これは当面ヘリオグラフの共同利用や太陽観測衛星計画の推進等で討議を進めるが、将来的にはこのような小委を発展させ、光学赤外と太陽とで別の専門委員会を構成する方向を探っていくことも了承された。

光学赤外関連では、（太陽小委に対応するものとして）既存観測所の運用を討議する光学赤外小委という総合的な小委を置き、その中にさらにプログラム編成や機器開発等を考えて行く分科会を置く方式が提案された。しかし、「すばる」プロジェクトや開発実験センターとの関連が加えて複雑になること、岡山や堂平の機器開発の decision making には「岡山会議」や新たに結成された「堂平利用者の会」に外部へのチャンネルを持たず、実際には機能すると思われること、等の判断から、当面光学赤外小委は置かない、という結論に達した。そして、プログラム小委は実務も含めて存続の方針が確認されたが、装置小委については議論の結果当座は設置しない、という方針が出された。

なお、新しいプログラム小委のメンバーは；

台外委員：岡村定矩（東大理）、平田龍幸（京大理）、若松謙一（岐阜大）

台内委員：安藤裕康、山下卓也、渡辺潤一

ex officio：桜井隆、菊池仙、前原英夫、平山淳

である。また、レフェリーの人選も行われた。

4. ユーザーズミーティング

本年9月に予定されているユーザーズミーティングでは、スクリーニング制の評価や岡山の装置計画について議論されることになると思われる。プログラム小委と観測所でインシアティブを取って準備を進めることとする。

5. 軍事研究排除

岡山では望遠鏡・装置の共同利用に軍事研究（および営利事業）排除の基本方針を、宣言の形で出すことを考えている。しかし、現状では大型計算機センターや野辺山等で歩調がかならずしも一致していると思われる。国立天文台として統一が取れているほうがよいので、それまではこの方針に沿って運用するが、宣言としては出さないこととする。

以上（文責：前原英夫）

V 第1回国立天文台理論計算機専門委員会議事録

日時：1993年4月23日（金），11:00-15:30

場所：国立天文台講義室

出席：小林、高原、辻、岡本、近田、西村、真鍋、観山、森田、小笠原（オブザーバ）
（欠席：池内、加藤、野本）

1. 委員長などの選出

委員長には観山委員、副委員長に野本委員がそれぞれ選出された。

また、幹事には森田委員が選出された。

2. 報告

○三鷹センター（西村委員）

レンタル計算機の契約見直しが行なわれ、CPU能力、記憶容量等の強化が行なわれた。また、OSにVM機能の導入が検討されている。

○野辺山（森田委員）

ハードソフトとも大きな変更はない。1993年夏に周辺機器見直しを計画している。

○水沢（真鍋委員）

来年3月で現在の計算機のレンタル期間がまる4年になるが、契約見直しで能力向上を図りたい。OSをUNIXにしたいと考えているが、技術的にいろいろな問題があり、今、議論を進めている。

3. 国立天文台計算機共同利用

○ 企業研究者の計算機共同利用申請について渡部潤一氏からの問題提起があった。（企業研究者の共同利用申請を一律に拒否するのは問題ではないか。）

過去の事例などを参考にしながら議論を進めた結果、今回のケースについては認めても良いのではないかと、という意見が多数を占めた。今後、企業所属の研究者の申請を認める際の基準として、次の様なガイドラインを設けることを了承した。

1. 研究業績（レフェリー付きの論文誌への投稿など）がある。
2. 国立天文台の共同研究者が推薦をする。
3. 営利目的ではないことが判断できる。

○ 計算機共同利用の採択方法について

以前、理論共通専門委員会の下部委員会である計算機共同利用小委員会が採否を決定していたが、今回からは、原則としてこの理論計算機専門委員会が直接採否を決定することにした。

○1993年度前期計算機共同利用の採択について

前期の申請は13件（三鷹2、野辺山10、水沢1）であった。議論の結果、申請については来所回数を一部縮小したものがあったが、全申請を認めた。

4. 1994年度（平成6年度）概算要求

計算機更新要求についての報告

3施設（三鷹、野辺山宇宙電波、水沢）で概算要求を行なうための準備を行なっている。

三鷹センター： スーパーコン+WS群

主目的 シミュレーション、VLBI、（すばる望遠鏡ソフト開発）

野辺山： 300 MFlops以下のミニスーパーやWS群などによる分散型システム。

5. 各計算機施設関連

○三鷹センター運用ワーキンググループについて

今後、三鷹センターでは、専用計算機の運用方針、西村氏退官後のデータベース管理など様々な運用に関する問題に対処しなくてはならない。そこで、三鷹地区の関係者による運用ワーキンググループを発足させることにした。メンバーは次のように決定した。

：観山、西村、小笠原、近田、吉沢、東大理学部センターから1名、
計算機センタースタッフ（畑中、大橋、小林、市川）

○野辺山の大型計算機への直接のIP接続を今後認める。また各jobクラスCPU時間の制限について議論された。

○水沢は外部とIP接続は可能である。この場合回線がISDNであるので電話代が問題となる。

6. その他

○天文台計算機ネットワークについて高速化の経過説明があった。

○太陽電波からの本委員会へのオブザーバ出席について議論された。太陽電波も大型計算機施設を持つため出席依頼が望ましいという結論に達し、花岡氏にお願いすることにした。

事務局からのお願い

光天連会報に載せる原稿を募集しています。次ページにあるような、私の意見というような原稿を特に歓迎いたします。

是非事務局まで原稿をお寄せ下さい。

VI 岡山観測所の将来について

吉田 道利 (国立天文台岡山)

岡山観測所の将来のあり方について、私の考えるところを述べてみたい。

岡山観測所は、現在、共同利用を主として運営されており、観測所としてのプロジェクトはもちろん、観測所としてのアイデンティティさえ、持っていないに等しい。そして、このことは、観測所内に常駐する天文学者の数の少なさと密接につながっている。岡山には年間多数の天文学者が訪れるが、ほとんどは単にサービス機関としての岡山を利用するだけである。ビジターと所員の間の議論、共同研究、観測所プロジェクト、そういった本来観測所といったものが持っているはずの活気溢れる雰囲気、今の岡山に乏しい。こうした状況は岡山の将来にとって、まったく望ましいものではなく、それは現在の運用方針に少なからぬ原因があると思う。

188cm望遠鏡が、すばるまではもちろんのこと、すばる以降もしばらくは(もしかするとずっと長い間)国内にある最大の望遠鏡であり、岡山観測所が光関係の国内最大の観測所であろうという事を考えると、岡山の、将来の日本の光学天文学に占める位置は非常に大きいと言わざるを得ない。また、アジアの東端という立地は、トランジェントな現象の国際共同観測において無視できない拠点であろう。しかし、単にそれしか望遠鏡がないから、という消極的な理由だけでは、どんどん予算なり人なりを削られていくであろう。やはり、目に見える成果をださなければならない。2m足らずの口径で、すばるのような8m望遠鏡時代で生き残っていくためには、8mには馴染まないような時間のかかるテーマをやるか、あるいは、すばるに取り付ける装置の実験・開発などの為に積極的に使っていくしかない。そのためには、現在のような、細切れの共同利用中心の運営ではダメだ。長期プロジェクト、観測所プロジェクトを中心とした運用方法に切り換える必要がある(ここで言っている長期プロジェクトとは、単に数年間に渡って続くプロジェクトという意味ではなく、1年の何分の1かを割り当てるという意味で使っている)。そうしてこうしたプロジェクトを通じ、常時数人の若手研究者が岡山に常駐し、あたかもホームテレスコープのように188cm鏡を使うことができれば、観測所としてのアクティビティを上げるだけでなく、若手の育成のためにも大きく役立つであろう。

装置がらみの話をすれば、まず、カセグレン分光器の刷新が急務である。現在の、いわゆる新カセグレン分光器には、これから10年を生き残っていくような力はない。おそらくあと2~3年でその実質的な役割を終えると思われる。新カセグレン分光器の効率は、CCDも含めてピークで5%程度しかない。諸外国のPOSが軒並50%に近い効率を誇っていることを考えると、そのギャップに啞然とする。つまり、今の分光器では、188cm望遠鏡の集めてくる光をほとんど捨てており、望遠鏡の性能を全く生かしていないと言える。岡山はシーイング、大気安定度などの面から、もとより撮像にはむいていない。そして、望遠鏡自身は、カセグレン焦点に最適化して作ってある。これから、山下T氏のOASISや、佐々木M氏のマイクロレンズアレイ分光器などが188cmカセグレン焦点にとりつけられるが、OASISは近赤外用であり、マイクロレンズアレイのほうは汎用性がない。光の微光天体分光装置を作ることは、188cmの本当の性能を100%使いきるという意味からも大切であると思う。もう、いまの分光器では天文学をやっているところまできつつあることは明らかであり、ここで新しい分光器を作り、すばる建設前後を生き抜いていくという努力をしなければ、岡山観測所は188cm望遠鏡の集めてくる光をどぶに捨てつつ、お払い箱になるであろう。

幾分抽象的な話になってしまった。国内に188cmと同等の光学望遠鏡が作られる可能性がきわめて低い以上、岡山観測所は、日本の観測天文学にとって大切な場所であり続けるだろう。たかが188cm、されど188cmである。繰り返しになるが、現在は188cm望遠鏡を完全に使いきっているとは思われない。そして、観測所としての研究のアクティビティが低い。すばるのためにも、岡山観測所の有効利用、活性化が必要であり、そのための努力を今から始めなくてはならないと思う。

VII すばるに関する

京都宇宙物理学教室での議論

1993年 6月16日 太田耕司 記

4月27日(火) 13:00-18:00

すばるソフト仕様検討会(略称 すし または 近田機関)

参加者 太田、小杉、嶋田、青木、臼井、石垣、前村(宇宙物理)

近田、田中、能丸、吉田み(国立天文台)

青木(木曾) 小林(大阪教育大学)

まず、すしのレビューを行った。次に赤外シミュレータの制御について紹介があり、続いて、観測装置の制御コマンドと情報の流れを制御コマンドの共通化という観点から議論した。一部京都での宿題が出され小杉氏を中心に考えることになった。京都でののはじめてのすしである。

5月は学会、観測等で人がいないので、会を持つことはなかった。

6月 1日(火) 13:30-17:00

すばるソフト仕様検討会(すし)

参加者 大谷、太田、小杉、山田、青木、富田、石垣、前村(宇宙物理)

近田、田中、沖田、能丸、吉田み(国立天文台)

浜部(東大天文センター) 小林(大阪教育大学)

前回京都での宿題、各種Focusingの手順とコマンドの流れ。観測者の立場からみたすばる使用時のシミュレーションについて。これは天文情報処理研究会にて寸劇が予定されている。

6月15日(火) 13:00-14:45

すばる観測装置の現況とFOCASの進行状況。

参加者 大谷、太田、小杉、山田、青木、富田、石垣、前村

観測装置大ワークショップ以降の動き。京都でなにをやるかの議論がもたれた。

6月22日(火) 11:00- 装置開発委員会報告会

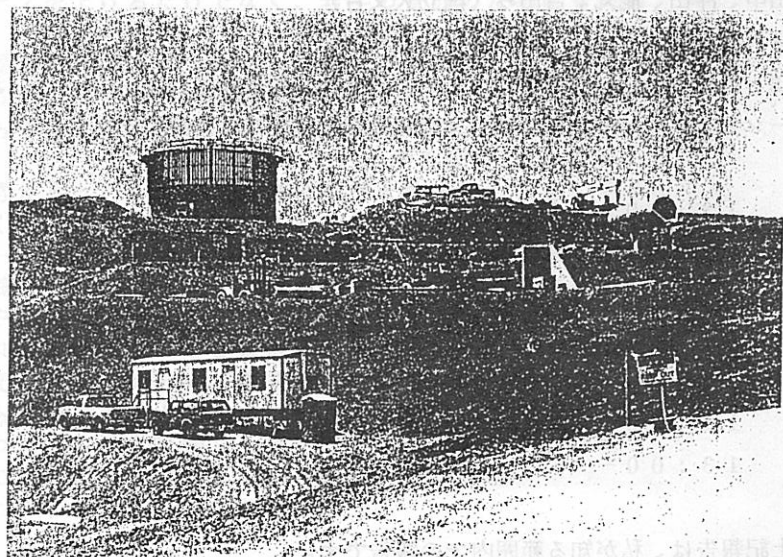
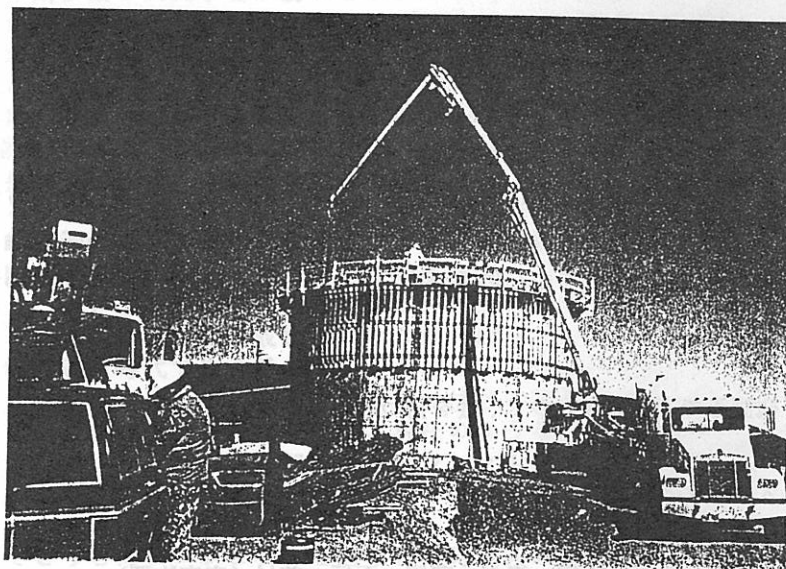
6月22日(火) 13:00- すし

いつもながら、上記報告は、私が知る範囲内での報告です。

以上

VIII すばるコーナー

最近のすばるの建設状況です。前号の会報に載った写真では、ピアの下の方しかできていませんでしたが、最近では、ピアのかなりの部分が出来上がってきているようです。このような写真をみると、建設が着々と進んでいるのが実感されます。尚、写真は成相さんが撮られたものを中桐さんから提供して頂きました。(太田)



IX 会員異動等

[異動]
吉田道利 国立天文台岡山(研究員) ← 京都大学理学部宇宙物理学教室

[連絡先等変更]

中田典規 〒263 千葉市稲毛区轟町4-3-30 ← 千葉市轟町4-3-30
(所属) 千葉経済大学短期大学部 千葉経済短期大学
Tel 043-255-3451 0472-55-3451

松村雅文
横尾武夫

Tel 0729-76-3211 (内3125) 06-771-8131 (内253)

[新入会]

嶋田理博	京都大学理学部宇宙物理学教室	D 3	075-753-3896
富田晃彦	京都大学理学部宇宙物理学教室	D 1	075-753-3908
青木賢太郎	京都大学理学部宇宙物理学教室	D 1	075-753-3907
加藤睦彦	京都大学理学部宇宙物理学教室	D 1	075-753-3908
臼井 正	京都大学理学部宇宙物理学教室	M 2	075-753-3908
石垣 剛	京都大学理学部宇宙物理学教室	M 1	075-753-3907
前村浩之	京都大学理学部宇宙物理学教室	M 1	075-753-3907
小林尚人	京都大学理学部物理学第2教室	D 3	075-753-3867
大屋 真	京都大学理学部物理学第2教室	M 2	075-753-3858
笠羽康正	〒504 大阪市中央区馬場町3-43 NHK大阪放送センター文化部		06-947-4720

住所、所属等に異動があった方は、速やかに事務局までお知らせ下さい。名簿をみますと、まだ変更届を出しておられない方が散見されます。心当りのある方、宜しくお願い致します。

事務局日より

蒸し暑い日が続きますが、会員諸氏におかれましては、如何お過ごしでしょうか。京都では今年も7月1日より祇園祭が始まり、いよいよ夏本番です。はもとビールのおいしい季節となりました。さて、本年度事務局は以下の体制でスタートすることになりました。宜しくお願い致します。(太)

事務局長 大谷 浩 (電話 075-753-3894)
会計 長田哲也 (電話 075-753-3869)
庶務 太田耕司 (電話 075-753-3896)

連絡先

〒606-01
京都大学理学部宇宙物理学教室
f a x 075-753-3897
e-mail ohta@kusastro.kyoto-u.ac.jp

光学天文連絡会会報 第68号 平成5年6月30日発行

編集 太田耕司

発行元：光学天文連絡会事務局

京都大学 理学部

〒606-01 京都大学理学部宇宙物理学教室

Tel 075-753-3894/96 Fax 075-753-3897

e-mail ohta@kusastro.kyoto-u.ac.jp

研究交流委員会報告

1993年3月29日および5月20日の委員会のインフォーマルな報告を行なう。正式な報告は、天文台ニュースに掲載される。

今期委員は、台内：石黒（委員長）、安藤、浮田、小笠原、桜井、花田、藤本、横山、および台外：舞原（副委員長）、池内、岡村、面高、大師堂、土佐、福井、それに天文台側からの *ex officio*メンバーの古在台長、海部企画調整主幹で構成されている。

1. 平成5年度予算について（報告）

実験開発センターが認められた。それに伴うポストは、助教授1と助手1。人事関連では、すばる推進室に2、管理部の会計と施設の各ポスト、および外国人客員1がついた。補正予算に関連して、共同研究宿舎、すばるの前倒分、実験開発センター建物などが認められる見込み。

2. 共同研究等の審査方法について

従来どおり共同研究・研究会・共同開発の各項目について審査し予算配分を行なうこととするが、これまでの問題点について若干の意見交換があった。たとえば、研究会はマンネリの傾向があるものもある。新しいアイデアによるものを積極的に取り上げるのがよい。また共同開発研究費は、大学での装置開発努力の最初の第一歩を踏み出すことをサポートする意味で大きな意義がある。しかし、その延長としてレベルの高い研究につなげていくためには、もう少し大きな額の別のカテゴリー（科研費の一般Aクラス）の共同開発までもサポートできるようなお金のチャンネルを開拓すべきである。ただ、それに対しては、現在の共同開発費をこえるような開発的研究は、すばる等の“プロジェクト”の中で対応すべきとの考えが出された。

以上のような議論の後で、共同研究は、5名の委員が採点委員となって点をつけて次回の委員会に諮る、研究会ワークショップ等は、別の5名の委員が採点委員となって点をつける、また、共同開発の採点は、15名の全委員で採点し、正副委員長ほかでヒアリングすべき申請を選定して、次回委員会の前にヒアリングを実施する、などの方法を決めて、5月20日の委員会で配分額を決めた。

3. 特別経費について

観測所で新しい観測装置を製作して進められるプロジェクトなどに対して申請する「特別経費」についても、企画・立案の段階から台外の研究者の提案を受け入れることを検討することになった。実際には、特別経費の申請の案は、台外研究者からのよい提案があれば歓迎されるであろう。

従来より特別経費と特定研究経費は、本委員会と総合計画委員会から数名の委員を選出し、合同で審議・決定しているとのこと。

4. 共同研究等の採択

5月29日の委員会で各部門の採択とその額を決定した。

共同研究等の成果報告を年度の終了後にだしてもらっており、研究会等と共同開発研究は天文台ニュースに掲載される。ただ、本委員会としてのレビューを通したほうがよいとの意見もあった。

（舞原記）